

国際研究集会 2025

Colloque international 2025

「教育における他者性」

« L'Altérité dans l'education »



2025.02.08(土)～09(日) 京都大学

2025.02.08～09 Université de Kyoto



目次： 2月8日（1日目）

基調講演 1

フィリップ・ブランシェ（レンヌ第2大学）「教育の横断的原理を構築するための批判的異文化アプローチの根本的寄与」..... 1

シンポジウム 1「複言語・異文化間教育と他者」

- ・福島青史（早稲田大学）「操作される市民概念—「日本人/外国人」の境界と他者性について—」..... 2
- ・宮里厚子（琉球大学）「琉球王国におけるフランス人宣教師の語学習得」..... 3
- ・エマニュエル・ル＝ピション＝ヴォルストマン（トロント大学）「ことばの友達学校：包括的教育アプローチ」..... 4

基調講演 2

原田義也（明治大学）「ブリコラージュとしての出会い——戦時下のウクライナで書かれた詩への学生による応答を事例として」..... 5

基調講演 3

エラティアナ・ラザフィ（ニューカレドニア大学）「教育における認識論的な他者性」..... 6

シンポジウム 2「教育の中の他者性と横断性：芸術と言語」

- ・マニュエル・ジョベール（リヨン第三大学）「文学表現に挑戦する異文化間性：ジュリー・オオツカと水林章を中心に」..... 7
- ・梶山祐治（筑波大学）「スクリーンのなかの他者性—中央アジア映画に日本人の姿を見る—」..... 8
- ・宋 恵媛（大阪公立大学）「コリアン・ディアスポラと多言語文化：カザフスタン高麗劇場を中心に」..... 9

目次： 2月9日（2日目）

基調講演 4

アブデルリル・アカリ（ジュネーブ大学）「教育・学習における文化的考慮を実りあるものにするために」..... 10

シンポジウム 3「異文化間性と教育研究」

- ・ヴェロニック・ルモワンヌ＝ブレッソン（ロレーヌ大学）「連続体としての異文化性のモデル化」..... 11
- ・ダム・ミン・トゥイ（ベトナム国家大学ハノイ校）「南北の教育パートナーシップと、それが学生の異文化間スキルの育成に与える影響」..... 12

シンポジウム 4「普遍性・包摂・関係性」

- ・岩内章太郎（豊橋技術科学大学）「普遍性の外部に出現する絶対他者」..... 13
- ・ファブリス・ワカリー（ニューカレドニア大学）「オセアニアの教育学における他者性の媒介としての関係性」..... 14
- ・倉石一郎（京都大学）「日本の教育論議における〈包摂〉概念の歪みとジャック・ランシエール哲学の可能性の中心」..... 15



基調講演 1

教育の横断的原理を構築するための批判的異文化アプローチの 根本的寄与

フィリップ・ブランシェ (レンヌ第2大学)

要旨

批判的異文化アプローチは、2000年代以降に発展したもので、異文化間の問題を他者性に対する肯定的な関係性のみ限定せず、否定的な異文化間の関係（すなわち他者性嫌悪に関連する排他的な態度や差別：外国人嫌悪やグロットフォビー（言語的な差別意識）など）の分析も含めることを特徴としている。こうした否定的な現象を理解することにより、それらを回避または克服し、他者性を肯定的に捉える教育を構想する道が開ける。このような考えに基づき、異文化間教育における基本的かつ横断的な原則を提案することが可能になり、その教育手法は、研究対象および目的との一貫性を保持するものとなる。具体例として挙げられるのが、言語による、言語を通じた、言語を対象とした教育の分野である。

参考文献

- BLANCHET, Ph., 2019, « De la nécessité d'une reconfiguration radicale et progressive de l'éducation aux langues, en langues et par les langues », dans A. Mabrouk, Kh. Mgharfaoui et C. Sabatier Bullock (coord.), *Enseigner et apprendre en contextes plurilingues. Quels aménagements et quelles modalités pour les langues premières / maternelles ?*, revue Relais n°4, université d'El Jadida (Maroc), p. 17-26.
- BLANCHET, Ph. & COSTE Daniel (Dir.), 2010, *Regards critiques sur la notion d'« interculturalité »*. *Pour une didactique de la pluralité linguistique et culturelle*, Paris, L'Harmattan.
- COSTE, D. (Dir.), 2014, *Les langues au cœur de l'éducation. Principes, pratiques, propositions*. Fernelmont, EME.
- DEMORGON, Jacques, 2005, *Critique de l'interculturel*, Paris, Anthropos.
- DERVIN, F. et JACOBSSON, A., 2021, *Interculturaliser l'interculturel*, Paris, L'Harmattan.
- TEVANIAN, P., 2017 [2008], *La mécanique raciste* (nouvelle édition augmentée et actualisée), Paris, La Découverte.

シンポジウム 1 「複言語・異文化間教育と他者」

操作される市民概念－「日本人/外国人」の境界と他者性について－

福島青史（早稲田大学）

要旨

2018年の入管法改正により日本の外国人政策は大きな転換を迎えた。特定技能の創設は、人手不足が顕著な産業分野への単純労働者の就労を正式に認めたものである。少子高齢化が進む中、「外国人との共生」は、すべての人の生活と密接に関係する身近な課題となり、日本語教育も共生社会を創造する社会政策の一つとして明確に位置づけられた。

一方で、日本における言語政策は、これまで様々なイデオロギーにより計画・実施されてきた。近代化の過程においては「日本人」の創造とともに「日本語」が作られ、「日本」という領域を形成した。日清、日露戦争後、「帝国」となった日本では、領域内に存在する異民族を包摂・同化するために「日本民族」「臣民」の内実を操作し、「日本語」を強いることにより統治が行われた。

今般の日本の動きは「外国人材の受け入れ」という言説の下、行われており、あくまでも外国人は日本人と分けて管理されている。ただ、歴史が示す通り、この「境界」は為政者の利害に従い操作されうるものであり、その力学は理解する必要がある。本発表では境界を創出する他者性の概念を検討し、現在の日本語教育政策が持つ政治性を考える。

シンポジウム 1 「複言語・異文化間教育と他者」

琉球王国におけるフランス人宣教師の語学習得

宮里厚子（琉球大学）

要旨

現在の沖縄県はかつて琉球王国として成り立っていたが、実質的には薩摩・日本に従属しながら中国にも進貢を続ける中継貿易国として存続していた。19世紀になると、その琉球に日本の開国を待つ西洋列強が頻繁に訪れており、フランスはその中でも後の日本との交流も念頭に、いち早く宣教師を通訳とするため琉球に滞留させた。1840年代から60年代まで滞在した計8人のフランス人宣教師は、日本の開国とキリスト教解禁を待ちながら琉球での語学習得を自らの滞在意義と認識し勉学に励んだ。琉球側の役人による日本語と中国語の授業は週に数回行われ、宣教師たちも一定の成果を上げて日本本土へと渡っていくことになる。本発表では、19世紀という歴史上の出来事であり、また宣教師という特殊な人々のことではあるが、フランスと琉球の交流史を紹介しつつ、19世紀の小さな島嶼国で西洋人宣教師たちの多言語学習がどのように行われたのか、また役人たちとフランス人たちとのコミュニケーションには現地の琉球語も使用されたとみられるため、琉球語とはどのような形で触れていたのかについて見ていきたい。

シンポジウム 1 「複言語・異文化間教育と他者」

ことばの友達学校：包括的教育アプローチ

エマニュエル・ル＝ピション＝ヴォルストマン（トロント大学）

要旨

なぜ自分の学校を私たちのネットワークに参加させたいのかと尋ねると、「ことばの友達学校 *École Amie des Langues*」の校長はこう答えた。「私は2つの言語をもって学校に入学し、卒業するときには一つの言語しかもっていませんでした。学校がなくてはならないこととは、この正反対です。学校は引き算ではなく、足し算をすべきなのです」(Le Pichon & Kambel, 2022)。この考察は、デリダがその著書『他者の単一言語使用 あるいは起源の補綴』の中で述べた次の引用と呼応している。「私は一つの言語しか持っていないが、それは私のものではない」。学校は、生徒から言語やルーツ、祖先の記憶を奪い、疎外感を持たせる世界に入ることを強いるという、この単純な観察に、生徒やその両親、そしてしばしば教師でさえも、どれほど多くの人が共感できることだろう。

この発表では、「ことばの友達学校」のネットワークを紹介する。ブロマートの尺度理論 (Le Pichon, 2023; Blommaert, 2007) を適用しながら、4つの大陸の教師と生徒の証言を分析する。ことばの友達の教育法を通して、私たちがどのように生徒の言語の正当性と市民としての帰属意識を回復させるダイナミズムに入ることができるかを示す。

参考文献

Blommaert, J. 2007. « Sociolinguistic scales ». *Intercultural Pragmatics*, 4 (1) : 1-19.

doi : <https://doi.org/10.1515/IP.2007.001>.

Derrida, J. (1996). *Le monolinguisme de l'autre ou la prothèse d'origine*. Paris: Galilée. (ジャック・デリダ (2024) 守中高明 (訳) 『他者の単一言語使用 あるいは起源の補綴』岩波文庫)

Le Pichon, E. (2023). Je suis, tu es, ils/elles sont francophones. *Arborescences, Revue d'études françaises*.

Le Pichon, E. & Kambel, E.R. (2022). The Language Friendly School: An Inclusive and Equitable Pedagogy, *Childhood Education*, 98:1, p. 42-49.

基調講演 2

ブリコラージュとしての出会い——戦時下のウクライナで書かれた詩への学生による応答を事例として

原田義也（明治大学）

要旨

本発表の目的は、戦時下のウクライナで書かれた詩への学生による応答、という自らの授業実践の教育的意義について、ブリコラージュという概念を手がかりとしながらあらためて検討することにある。

発表者はこれまでに三回ほど、出講先の複数の担当授業内で、2022年2月24日のロシアによるウクライナへの全面侵攻以後に書かれた現代ウクライナ詩の拙訳と注釈をテキストに用いながら、それらの詩およびその作者に対して「返信」をしたため、という課題を受講生に与えた。戦争の圧倒的な暴力と不条理の只中から生まれたそれらの詩に対して、受講生たちの多くは、何をどう答えたらいいか分からないという戸惑いを覚え、実際的な救いの手を差し伸べることができない自分自身の無力さを痛感したに違いないが、目の前にある相手の「声」にとにかく応答しなければならないというシチュエーションが、結果として、受講生各自に等身大の言葉を駆使したブリコラージュ的応答を促すことにもなった。

「教育における他者性」という今回の国際集会の総主題を受けて構想した本発表のささやかな問題提起が、研究・教育分野の枠組みや、学生・教員の立場を越えて、持続可能で多様性が尊重される社会を構築するための議論に一石を投じるものとなれば幸いである。

基調講演 3

教育における認識論的な他者性

エラティアナ・ラザフィ (ニューカレドニア大学)

要旨

教育と他者性を結びつける問題に関する文献には、相反する2つの考え方が存在する。「他者性だけが教育を可能にする」(Lamarre, 2006)という主張と、「他者とはあまりに根本的に異なる存在であり、私たち自身の在り方を基盤にしては認識したり理解したりすることができない」(Marpeau, 2013)という主張である。一方では私たちは他者に頼らなければ学ぶことができず、もう一方では、私たちは自分自身でいつづける限り実際には学ぶことができないという。

さて、カナキー・ニューカレドニアに導入されたフランスの教育制度の根本においては、生徒になることを学ぶということは、カナック(先住民)やオセアニア人であることを「忘れる」ことと同義となっている。学校で学ぶ知識へのアクセスは、カナックの言語、文化、芸術といった既存の知識を削ぎ落とすことを伴う。そのため、教育に関するあらゆる問題は、必然的に「認識論的他者性」という問題を問いかけるものとなる。

「脱植民地的な自己解放」は、「植民地性の認識」(Mignolo, 2013 : 185)によって初めて達成されると仮定するならば、認識論的他者性を包含する教育、すなわち脱植民地的な他者性への教育を促進するためには、どのような条件や意識改革が必要とされるのだろうか？

参考文献

- Lamarre, Jean-Marc. 2006. « Seule l'altérité enseigne », *Le Télémaque*, vol. 29, no. 1, pp.69-78.
- Marpeau, Jacques. « L'altérité, l'altération dans le processus éducatif », *Le processus de création dans le travail éducatif*. Sous la direction de Marpeau Jacques. Érès, 2013, pp. 67-86.
- Mignolo, W. 2013. « Géopolitique de la sensibilité et du savoir. (Dé)colonialité, pensée frontalière et désobéissance épistémologique. *Mouvements*, 1 ; 73, pp. 181-190.

シンポジウム 2 「教育の中の他者性と横断性：芸術と言語」

文学表現に挑戦する異文化間性：ジュリー・オオツカと水林章を中心に

マニユエル・ジョベール（リヨン第三大学）

要旨

本発表では、フランス語圏の作家である水林章と、英語圏の作家であるジュリー・オオツカを分析することを通して、文学における他者の表象を探求する。

この二人の作家は、それぞれのやり方で、日本文化とフランス文化、日本文化とアメリカ文化の言語的・文化的接点を探求している。

この研究の目的は、ミメーシスとディエゲーシスの間で揺れ動く文学が、他者の言語と文化にアクセスする特権的な手段であることを示すことである。

ここでいう「他者」とは、ラカン派精神分析で言う「大文字の他者」と「小文字の他者」の対立を超えているように思われる。ジュリー・オオツカは『屋根裏の仏さま』で日本人移民とアメリカ人の複雑な関係を探究したのに対し、水林章は *Une Langue venue d'ailleurs*（他所からきた言語）でフランス語との愛に満ちた関係に私たちをいざない、「*Je est un autre*」（私とは他者である）というアルチュール・ランボアの定式をわがものとするのである。

シンポジウム 2 「教育の中の他者性と横断性：芸術と言語」

スクリーンのなかの他者性—中央アジア映画に日本人の姿を見る—

梶山祐治（筑波大学）

要旨

本報告では、カザフスタンで製作されたサティバルディ・ナリムベトフ監督によるカザフ語・ロシア語の複言語映画『小さなアコーディオン弾き』（1994）を取り上げ、スクリーンのなかの他者性という問題について考える。戦後のカザフスタン南部の炭鉱町を舞台にしたこの作品は、同地に抑留されていた日本人捕虜が登場するという点でも、画期的な作品である。この作品をさらに特異なものにしているのが、日本人捕虜の役を演じている、高麗人（コリョサラム）俳優エドゥアルド・パク（1961-）の存在である。

パクが演じた捕虜は、片言の日本語に朝鮮語を混ぜて話す、設定としては不正確な人物である。通常、映画におけるこうした不正確な造型は日本人表象の観点からは批判されることが多いが、この映画への高麗人俳優の出演は、日本の朝鮮植民地化とスターリンによる朝鮮人強制移住という 2 つの民族的悲劇の結果、実現している。そしてパクの出演によって、『小さなアコーディオン弾き』で中央アジアにおける日本人抑留者という問題を描くことが可能になった。

本報告では、はじめに『小さなアコーディオン弾き』について視覚のモチーフを中心にテキスト分析をおこない、パクが日本人捕虜を演じることの意味を検討したのち、スクリーンのなかの他者に眼差しを注ぐ意味について考察する。

シンポジウム 2 「教育の中の他者性と横断性：芸術と言語」

コリアン・ディアスポラと多言語文化：カザフスタン高麗劇場を中心に

宋 恵媛（大阪公立大学）

要旨

本報告では、日本の「在日朝鮮人」とカザフスタンの「コリョサラム」という二地域のコリアン・ディアスポラの言語や文化を通して、コリアンスタディーズの文脈での教育における「他者性」導入の重要性について検討する。まず、在日朝鮮人とコリョサラムの歴史的背景や地域的環境による言語や文化の相違を比較検討する。その後、カザフスタンのアルマティを拠点とする総合芸術団「高麗劇場」の実践を紹介する。高麗劇場は約 100 年前にロシア沿海州で誕生した劇団で、現在はロシア語、カザフ語、コリョマル、現代韓国語という四言語で公演活動を行っている。

これらの事例に見られるように、コリアン・ディアスポラたちは、帝国—植民地、「本国」—ディアスポラ、居住地におけるマジョリティー—マイノリティーといった権力構造の中で、多文化的価値を創造してきた。本報告では、コリアンスタディーズや朝鮮語の教育において「他者性」に関するこのような知見を取り入れることで、学習者が単一言語主義や一国史観を超えて歴史や文化の多層性を理解し、グローバルな文脈における文化変容への深い理解を得る可能性を示す。

基調講演 4

教育・学習における文化的考慮を実りあるものにするために

アブデルリル・アカリ (ジュネーブ大学)

要旨

この発表では、教育の過程において文化を考慮することの必要性を明確にする。

まず、文化という概念が教育の主要な次元（生徒または学習者、教師、知識、教育法、機関）においてどのような意味を持つのかを示したい。これら5つの次元は、デジタル化によって可能となった知識の創出や流通の目覚ましい速度を考えれば、現代における急速な変化と不安定性によって特徴づけられるだろう。

次は、現代の教育システムにおいて文化を建設的に考慮する際の障害を明らかにしたい。実際、文化の考慮は、しばしば本質主義的でフォークロア的な文化的他者性の表象に還元されることがある。

最後に、教室における教師の教育実践に焦点を当て、教育における異文化的・超文化的アプローチを促進する専門的な姿勢について論じる。

シンポジウム3 「異文化間性と教育研究」

連続体としての異文化性のモデル化

ヴェロニック・ルモワンヌ＝ブレッソン（ロレーヌ大学）

要旨

私のフィールド調査の要約（Lemoine-Bresson, 2024）は、人間の物語や教育関係者との関わり方、そして文献と結びつけて、インターカルチュラル（異文化的）を連続体として理解する構築に寄与した。この連続体は、不変の基盤、すなわち他者性の次元と自己、および自己と他者との関係に基づいている。理論と実践を結びつけながら、インターカルチュラルの概念を7つにまとめ、それらを連続体として展開した。このアプローチは、実践的な定義やインターカルチュラルの意味を狭義に問題化する見方を超え、概念的な多様性を明らかにする。特に、教育と学習の場における文脈や状況に応じた変化を反映している。

この連続体に基づいて構築された概念は、固定的でも包括的でもなく、インターカルチュラルを二項対立的に捉える視点に疑問を投げかける。また、多重に脆弱な立場に置かれている人々が巻き込まれる支配や抑圧のシステム論的な論理を検討する助けとなり、自己と他者の間の境界線がどこにあるのか、あるいはそれが存在しないのかを特定することに寄与する。この考察の結果、連続体としてのインターカルチュラルのプロトタイプ的なモデルが構築された。それが、「インターカルチュラル連続体の花」（Fleur du Continuum Interculturel, 略称 FIC）であり、フェミニズムの研究に触発されたものである。この FIC を用いた教育関係者の研修における試行的な活用例が紹介され、議論される予定である。

キーワード

異文化、連続体、教育、教員養成、7つの概念、花、教育関係者の声

シンポジウム3 「異文化間性と教育研究」

南北の教育パートナーシップと、それが学生の異文化間スキルの育成に与える影響

ダム・ミン・トゥイ (ベトナム国家大学ハノイ校)

要旨

グローバル化の進展に伴い、高等教育機関で学ぶ学生にとって、職業参入をより容易にするために異文化間能力は不可欠なものとなっている。ベトナム国家大学ハノイ校のフランス語学科では、北側（先進国）にあるフランス語圏の教育機関（フランス、ベルギー、カナダ）とのいくつかの教育提携プログラムを、対面式またはハイブリッド・コースの形で強化しており、そこで学生は言語的・学問的スキルを強化できるだけでなく、他者性への感性を高め、異なる多文化的文脈に適応する能力を養い、自らの文化的アイデンティティを振り返る姿勢を身につけることができる。したがって、このような交流は、学生の異文化間能力や専門的スキルを伸ばす貴重な機会となる。しかし、このような交流には、カルチャーショックや適応、統合など、課題がないわけではない。パートナーシップのメリットを最大限に生かすためには、あらゆる段階において学生へのサポートを充実させ、パートナー機関同士がより緊密でバランスの取れた協力関係を築くことが重要である。本発表の目的は、ベトナム国家大学ハノイ校と北側の提携校との協力プログラムがフランス語学科の学生に与える影響を、基本的な異文化間概念と学生との質的インタビューから得られたデータを用いて分析することである。また、様々なパートナーシップの形態を紹介しながら、我々が直面した課題を明らかにし、最後に持続可能な発展を見据えた提言と展望を提示する。

キーワード

南北間教育パートナーシップ、異文化間能力、課題、展望、機会

シンポジウム4 「普遍性・包摂・関係性」

普遍性の外部に出現する絶対他者

岩内 章太郎（豊橋技術科学大学）

要旨

本発表では、現象学の観点から普遍性と他者の関係を考える。現象学の創始者であるフッサールは、〈私〉の意識体験の洞察から出発しつつ、普遍認識に至る可能性を探究した。すなわち、複数の〈私〉が互いの意識体験の内実とその同型性について間主観的な確証を得るとき、そこに（間主観的な）「普遍性」が創出される、と考えたのである。

しかし、現象学者のレヴィナスはこれを批判し、他者の本質を無限性と捉えたうえで、決して普遍性（全体性）に回収されることのない、他者の倫理学を提唱している。本発表では、このような他者を「絶対他者」と呼んでおこう。それは、〈私〉の力能の彼方に生成しつづける他者であり、〈私〉の志向的把握の企図から絶えず離れていく他者でもある。つまり、絶対他者は普遍性の外部に出現する。

普遍性が全体性に転化する可能性、そして、全体主義の暴力性に鑑みると、レヴィナスによるフッサール批判は妥当だと思われる。しかし、事態はそう単純ではない。というのも、普遍認識の可能性を断念することは、絶対他者の自由や権利を擁護する可能性を断念させかねないからである。本発表では、普遍性と絶対他者の関係を改めて問い直し、普遍性という概念に潜む暴力性だけでなく、その意義を考えてみたい。

シンポジウム 4 「普遍性・包摂・関係性」

オセアニアの教育学における他者性の媒介としての関係性

ファブリス・ワカリー (ニューカレドニア大学)

要旨

ロイヤルティ諸島のリフー島では、「otretre」とはカナックの伝統的家屋である「カーズ」の骨組みを固定するために用いられる蔓を指す。炉の中央で燃やされる火から生じる煙は、時間とともにこれらの蔓を強固にする。この蔓は、社会組織内で結束を維持するためにクランの構成員が相互に結びつく絆を象徴している。そして煙は、これらの絆を強化するための慣習的な交流を象徴している。

カナックの社会組織はクラン制に基づいており、クランの構成員は共通の祖先を持つとされている。このため、クラン内の構成員同士は相互依存の関係にある。ティチェ (tixe) (ドレフ語で「兄」を意味し、フランス語では不正確に「リーダー」と訳されることが多い) は、この社会組織内で社会的結束を保証する役割を果たす。ただし、その権威は相対的であり、他のクラン構成員の支持にも依存している。このように、関係性は常に再構築され、強化され、発展する。この関係性は、カナック社会において秩序を維持するために不可欠な条件である。

このカナックの先住民的な視点は、私たちが他者性として提唱するオセアニア教育学モデルの柱の1つである「関係性」に影響を与える (Waminya : Eatene 2019)。この視点は、現在のカレドニア教育制度の見直しという観点で特に重要であると考えられる。現在の制度は、植民地主義的な枠組みに依存し、閉鎖的かつ分野主義的であるため、行き詰まりを見せている。人間が知識を効率的に伝達するために関係性が必要であるように、形式的・非形式的な知識自体も相互に依存し合い、意味を持つためにはつながりを持たなければならない (Razafi et al., 2023 ; Boi, 2024)。

参考文献

- Boi, D. (2024). L'écriture scientifique : déconstruire ses/ces blocages pour écrire autrement. Journée d'études doctorales. UNC. Nouvelle-Calédonie.
- Eatene, P. (2019). Dokamo : pour un nouveau projet de société. Site internet du lycée Dokamo : <https://www.uep.nc/do-kamo-pour-un-nouveau-projet-de-societe-partie-ii/>
- Razafimandimbimanana, E., Wacalie, F., Bearune, S. (2023). Pédagogie et océanité. PIURN, Rarotonga. 4-6 juillet 2023.

シンポジウム4 「普遍性・包摂・関係性」

日本の教育論議における〈包摂〉概念の歪みとジャック・ランシエール哲学の可能性の中心

倉石一郎（京都大学）

要旨

Jacques Rancière は私にとって特別な哲学者である—ほとんどフランス語を読解する力が自身にないにもかかわらず。主に日本をフィールドにマイノリティの教育・福祉による包摂というテーマに取り組むなかで、既存の制度や研究枠組に対して私が覚えていたどうにもならない苛立ちを初めて言い当てたのが、ガート・ビースタ (Biesta, 2010=2016) を介して知ったランシエール哲学であった (倉石 2021)。既存の教育・福祉論は困窮者への手当てによってスタートラインを揃えることに腐心する一方で、結局は「自由」競争の野にかれらを放つことで資本主義と妥協し、補完しさえしている。他方、知性の平等から出発した卓抜な外国語教育論『無知な教師』(Rancière, 1987=2011) にせよ、政治哲学上の主著『不和あるいは了解なき了解』(Rancière, 1995=2005) にせよ、ランシエールは平等を目標でなく前提、出発点に据えることで既存の妥協的な改革思想に激しい揺さぶりをかける。本報告では、「日本型インクルーシブ教育」論の跋扈に象徴されるような日本における包摂 (インクルージョン) をめぐる認識の決定的な歪みをまず指摘し、次にその閉塞状況を穿つような希少な事例に言及する。その上で最後に、ランシエール哲学が日本のインクルーシブ教育に開く可能性の中心を示すこととする。

参考文献

- Biesta, G. 2010, *Good education in an age of measurement: ethics, politics, democracy*, Paradigm Pub (=藤井啓之・玉木博章訳 2016 『よい教育とはなにか：倫理・政治・民主主義』白澤社)
- 倉石一郎 2021 『教育福祉の社会学：〈包摂と排除〉を超えるメタ理論』明石書店
- Rancière, J. 1987, *Le maître ignorant : cinq leçons sur l'émancipation intellectuelle*, Fayard. (=梶田裕・堀容子訳 2011 『無知な教師：知性の解放について』法政大学出版局)
- Rancière, J. 1995, *La méésentente : politique et philosophie*, Galilé. (=松葉祥一・大森秀臣・藤江成夫訳 2005 『不和あるいは了解なき了解：政治の哲学は可能か』インスクリプト)

実行委員会

西山教行
大山万容
大木充

Jean-François GRAZIANI

Ghislain MOUTON

赤桐敦

西島順子

小柴裕子

孫工季也

Daniel Roy PEARCE

